茶をしばく

林 哲夫

喫茶店はお茶を飲む場所……ではない。じゃあ、何をするのか？「人は何もしないでいることはできない」とフランス人の誰かが言っている通り（中国人なら為無為と言うのだろうが）、人は何もしないでいようと思ったときに、お茶や珈琲を飲むのである。あるいはお茶を口実にして別の何かをするのである。

『喫茶店の時代』（二〇〇二年）という本を出してしばらくしたころ、衛星放送のある番組に出演することが決まった。五人ほどのクルーが張り付いて、およそ一週間、拙宅はもちろん、京都の古本まつり、大阪での装幀本展示会など、さまざまな場面を撮影した。ベテランのカメラマン氏はあるシーンが終って一段落すると、すかさずこう言うのだ。

「ほな、チャア、しばこか」

チャアしばく、まだ何か撮るのだろうか？　初めて聞く言葉だった。連れて行かれたのは馴染みの喫茶店、要するに「一服しよう」のココロである。

関西地方で広く用いられる「しばく」とは「打つ、殴る」であろう。日本国語大辞典第二版はシワ（撓）・ク（叩くの意を表わす語尾）という前田勇の語源説を引いている。かなり古い方言のようだ。残念ながら「茶をしばく」という用例は採られていなかった。さらにネットで検索してみると、一九八〇年代から流行った若者言葉だという語釈が見つかった。一説には大阪の高校野球部員たちが喫茶店に行くことを「ティーバッティング」と言い始め、それを日本語に直して「茶をしばく」になったという（もちろん誤訳）。牛しばく（吉野家へ行く）、オケしばく（カラオケへ行く）、ねずみしばく（ディズニーランドへ行く、開園一九八三年）などの類似した用例もある。「しばく」は河内弁で「する」の意だとも言い、また上方芸人が全国に広めたとも。

何をするのか？　ということで、忘れられない喫茶店がある。七〇年代の終りごろ、東京都心の学生街。民芸調のインテリア、棚には白い陶磁器が並べられていた。女友達と二人で入って珈琲を注文した。ひと息ついて彼女がノートに手紙の下書きを始めた。すると店主が飛んできて怒り出したのだ。

「ここは珈琲を飲むところだ！」

え？　耳を疑った。珈琲を飲む行為だけしか許されない喫茶店、そんなもの考えられるだろうか。「勉強するなら出て行ってくれ！」。勉強じゃないと抗弁しはしたものの、あきれ果てて早々に退散した。今から考えれば、図らずも喫茶店の本質を教えてくれた事件だったのである。

「茶しばこか？」、先日、試しに近所の娘さんを誘ってみた。「そんな言葉、うちは使わへん」、キッパリ。まさに空振りであった。

プロフィール
1955年香川県生まれ。画家。武蔵野美術大学卒業。著書『喫茶店の時代』（編集工房ノア）により第15回尾崎秀樹記念大衆文学研究賞受賞。編著・装幀『書影でたどる関西の出版100』（創元社）により第9回竹尾賞デザイン書籍優秀賞受賞。他に『歸らざる風景――林哲夫美術論集』（みずのわ出版）、『古本デッサン帳』（青弓社）、『古本屋を怒らせる方法』（白水社）などの著書がある。

月刊 みんぱく
5月号目次

1 エッセイ　千字文
茶をしばく
林 哲夫

特集　たまり場

2 沖縄のユタと女のたまり場
吉田 佳世

4 オフィスのたまり場
八巻 惠子

5 バルセロナの日本人宿
大野 哲也

7 マンチェスターの水タバコ店
川瀬 慈

8 それぞれの酒場
金田 純平

9 海辺のたまり場から――老いた漁師たちの安らぎの場
馬場 雄司

10 ○○してみました世界のフィールド
アンデスの聖地をめぐる
八木 百合子

12 みんぱく Information

14 味の根っこ
カラーチ
大塚 奈美

16 文化遺産おもてうら
観光資源活用と文化保護
――中国、世界遺産「麗江古城」
高倉 健一

18 手芸考
ニッポンの「手芸」――近代から現代まで
山崎 明子

20 ながなんぢゃ
ほとけの名前
末森 薫

21 次号予告・編集後記